The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	非暴力の系譜 : M.K.ガンディーの真理の闘い
Author(s)	加瀬, 佳代子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49478
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【8】

氏　　名	加　瀬　佳代子（かせ　かよこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　22395　号
学位授与年月日	平成20年6月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**非暴力の系譜－M.K. ガンディーの真理の闘い－**
論文審査委員	（主査） 教　授　中　　直一 （副査） 教　授　木村　茂雄　　准教授　山田　雄三

論文内容の要旨

1　研究目的

本論文は、一般に非暴力の創始者とされるガンディーを起点として、現代に至るまでの非暴力の系譜を考察したものである。

非暴力は、現在も多くの人びとが正当性を認める思想のひとつである。たしかに、「暴力は許されない」という命題の道義性に異論を挟む余地はほとんどない。しかし実際に非暴力が語られる場面に注目するなら、その思想自体が孕んでいる問題性が浮かび上がってくるように思われる。

その端的な例として、9.11事件以後、アメリカ大統領ブッシュと非暴力主義者たちがそれぞれに唱えた主張を挙げることができる。ブッシュは「テロとの戦争」と銘打って、アフガニスタンやイラクへの軍事攻撃を決行したが、非暴力主義者たちはこれに異を唱え、両者の見解は真っ向から対立した。しかし興味深いのは、両者がそろってガンディーに言及しつつ、「非暴力」を根拠にそれぞれの論を展開している点である。どちらかが欺瞞的に非暴力を騙ったのだと批判することももちろん可能だが、しかし「非暴力」の思想自体に、これら対極的な立場の両方を支えてしまう幅の広さがあるのだとも考えられる。

ガンディーや非暴力に対する批判はこれまでにもなされてきた。例えば、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートは、ガンディーが道徳を強調したために、暴力／非暴力という二分法的理解が社会に蔓延し、その結果すべての暴力が悪とみなされ、抵抗運動を進めることが困難になったと批判している。また、アルンダティ・ロイも、ガンディーを始めとする非暴力の偉人が「全盛期を過ぎて商品化され、自分たちが闘っていた偏見や頑迷、不公正を助長」している現代の捩れた状況を指摘している。

しかしこれらの批判は、ガンディーの非暴力を十分に踏まえたものとは言い難い。そもそも、ガンディーと現代との時間的・空間的な距離を考慮するなら、現代の非暴力をガンディーのそれと同一視することはまず不可能である。

ガンディーの非暴力と現代の「非暴力」との差異は、その運動名からも察することができる。現在では「非暴力・不服従」として一般に知られているが、ガンディーは自身の運動に、サンスクリット語で「真理の主張」を意味する「サッティヤーグラハ（Satyagraha）」という名を与えていた。問題は、この名称が正しく伝えられていないことだけでなく、「非暴力・不服従」という通称が、「サッティヤーグラハ」を理解する妨げにもなっているということである。なぜなら、「非暴力・不服従」はその抵抗の手段を示すだけで、サッティヤーグラハの全容を表すものではないからだ。例えば、サッティヤーグラハの活動指針には非暴力はもちろんのこと、糸車を使った綿布の生産や菜食主義も含まれていた。すなわち「ガンディーの非暴力」という限定的な理解は、サッティヤーグラハの総体を捉え損ねたものだと言える。

そこで本論文の第Ⅰ部では、ガンディーの非暴力をサッティヤーグラハに差し戻すことによってその全容を明らかにする。そして第Ⅱ部では、ガンディーの手を離れた非暴力が現代に到る過程でいかに変化し、人びとに影響を及ぼしてきたのかを考察する。

2　第Ⅰ部の研究内容

第Ⅰ部「モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーのサッティヤーグラハ」では、サッティヤーグラハにおける非暴力について、ガンディー自身の言説の分析に基づいて考察した。

第１章では、ガンディーの思想の基本的な位置づけについて検討した。それは従来、「反近代」、「反西洋」などのレッテルを付されてきたが、メディアを活用するなど、ガンディーには近代的な側面も見受けられることを踏まえるなら、そうした表現ではガンディーの位置を正確に捉えることはできないと思われる。そこで本論は、ガンディーの視座は「市民社会の内側ではないところ」にあったとするパルタ・チャタジーの見解を敷衍し、サッティヤーグラハが「西洋対東洋」や「近代対伝統」といった二項対立的な枠組みに収まるものではないことを明らかにした。

第２章では、第１章での結論をもとに、ガンディーの視座が「市民社会の内側ではないところ」に到る過程を考察した。少年の頃、ガンディーはイギリスに対して憧憬と敵意の入り混じったアンビヴァレントな感情を抱いていた。しかし、弁護士資格の取得のためにロンドンに留学すると、英国臣民としてのアイデンティティを追い求めることになる。結果としてエリート弁護士になったガンディーは、この時点では英国臣民として市民社会の内側にいたと言える。そのガンディーが抵抗運動を開始したのは、南アフリカに渡り、自ら人種差別法の対象となったことを契機としている。つまり彼の闘いは、近代法との闘いとして始まったのだ。実際ガンディーは、当初は弁護士として法に適った方法で抗議活動を進めていたが、やがてその方法の限界を思い知り、自ら法を犯すことを決意する。この時点で彼は、法が制定する秩序体系から、自ら排除されることを選択したと言える。その結果、牢獄という「市民社会の内側でないところ」に辿り着いたガンディーは、そこで西洋近代的な枠組みに基づかない、新たな秩序体系を構築し始める。そしてそれを法体系として発展させたのが、サッティヤーグラハだったと言える。すなわちガンディーの目的は、西洋近代法を崩壊させ、それに代えて新たにサッティヤーグラハの法を立ち上げることだったのである。

第３章では、ベンヤミンの『暴力批判論』における「神話的暴力」と「神的暴力」という概念を援用し、サッティヤーグラハの法について考察した。ベンヤミンは法措定的暴力と法維持的暴力を持つ国家権力を神話的暴力と定義し、それに対抗する力として、神的暴力の概念を提起した。ガンディーの非暴力を神的暴力に位置づける主張はこれまでにもなされているが、本論は、サッティヤーグラハはその概念枠に収まるものではないことを明らかにすると同時に、法としてのサッティヤーグラハが神話的暴力の概念にも回収し切れないことを指摘した。さらに、その法としての力が人びとに向かうとき、どのような作用を及ぼしたのかを考察した。結論として、人間の生に介入するサッティヤーグラハの法は、人間の感情を抑制し、支配に従順な人間を作り出す現代の生政治に通じるものであることを主張した。

3　第Ⅱ部の研究内容

第Ⅱ部「マハトマ・ガンディーの非暴力」では、ガンディーの手を離れた後の非暴力について考察を進めた。

まず第４章では、ガンディーとソローの思想的連続性という問題を取り上げた。ガンディーの不服従はソローの影響を受けたものとしばしば言われてきたが、実はそのことをガンディー自身は否定している。そこで本章では、ガンディーのテクストを精査し、ソローを読む以前にガンディーが不服従を提起していたことを明らかにした。また、ガンディーが英語の表現を借用せざるを得なかった事情についても考察し、後にガンディーがインドの土着の言語を重視するようになったのは、植民地支配に伴う言説空間の支配と闘うためだったことを明らかにした。さらに、ガンディーとソローの連続性という観点は、ソローの伝記作家であるH.S.ソルトの誤解から始まったことを指摘した。

第５章では、インド独立運動期に視点を移し、ナラヤンの *Waiting for the Mahatma* を通してサッティヤーグラハの分析を行った。サッティヤーグラハに加わった青年を主人公とするこの小説からは、独立運動期の時点ですでに、サッティヤーグラハに「ずれ」が生じていたことが読み取れる。この青年はテロ活動に手を染めていくにもかかわらず、非暴力を標榜するサッティヤーグラハの実践者としてのアイデンティティを最後まで保持している。このような矛盾から、それぞれの人間が想定する「非暴力」の間には最初から「ずれ」が潜んでいたことを論証するすると同

時に、作者のナラヤンは、暴力と非暴力という二分法の限界を見抜いていたことを指摘した。

第６章では、V.S.ナイポールの小説および文明論におけるガンディー批判を、第３章で確認したサッティヤーグラハの陥穽と関連付けながら、その問題点を考察した。ナイポールは、インドを貧困に陥らせた一因として、ガンディー主義を批判している。この批判の妥当性を判断するために、まずはナイポール自身の視座について考察した。そして彼の視座が現代的な秩序体系の支配の内側にあること、さらに次世代の立場から前世代が関与したサッティヤーグラハを批判していることを確認した。彼のサッティヤーグラハ批判は、現代のいわゆる先進社会における非暴力が、そこに生きる個人の内側に作用してその感情を抑制し、「自己愛」と「むなしい自尊心」だけを育むものであることも、敏感に察知したものと言える。

第７章では、ガンディーの非暴力を現代的な非暴力思想に変質させたひとつの契機として、映画『ガンディー』を分析した。ガンディーを模倣した映画の主人公は、ガンディーが定めたサッティヤーグラハの法規を解体し、そこから非暴力だけを抜き出すことによって、それを単に同情を誘うためのものへと変化させたのである。

4　まとめ

道徳を価値基準にしようとしたガンディーの試みは、現代でも意義のあるものと思われるが、その非暴力は、現実には達成不可能なものと言わなければならないだろう。なぜなら、彼の非暴力は、すべての人間がサッティヤーグラハの法のすべてを実行することによって始めて達成できるものであり、しかもそれは人間の善意に全面的に依存しているからである。

本論文では、ガンディーの非暴力に生政治という現代的な支配の要素を見出し、それが現代の「非暴力」にも息づいていることを指摘した。しかしながら、現代の「非暴力」が不要あるいは無効であると主張しているわけではない。人間の世界から暴力がなくならないとするなら、非暴力もまた消え去ることはないだろう。しかし暴力をめぐる問題は、力関係の問題に他ならない。したがって、暴力を解決するためには、その力と競り合い、より非暴力的な均衡点を探る以外に方法はないと思われる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、ガンディーの「非暴力・不服従」思想が含む問題点を、ガンディーの著述および彼の実践において検証すると同時に、ガンディーの思想が後世の研究書や小説作品、映画等でどのように変形され流布されていったかということを明らかにしたものである。

従来ガンディーの非暴力思想は、その根底にある「サッティヤーグラハ」を顧慮せぬままに語られてきたきらいがあるが、加瀬氏は本論文第１部でまず、ササッティヤーグラハが西洋近代の統治システムとは異なる新たな秩序体系の法であることを解明し、このようなサッティヤーグラハに基づくガンディーの非暴力思想が、現代的な非暴力とはその内容を異にするものであると論じている。本論文第２部では、このようなガンディーの非暴力思想が、いかにして現代的な非暴力思想に読み替えられていったのかという問題について、ガンディーの思想をソローの思想と結びつけたソルトのソロー論、ガンディーが主導するインド独立運動を描いたナラヤンの小説、ガンディーをモデルにしたと目される人物を主人公とするナイポールの小説、および映画『ガンディー』を取り上げ、ガンディーの思想が、これらの作品によって変形・流布されていった経緯を詳細に分析している。

本研究は従来の研究者が取り上げてこなかった「サッティヤーグラハ」に着目し、それとの関連でガンディーの「非暴力」を考察した点、またガンディーの思想が後世において変形されながら受容されてゆくプロセスを実証的に論じた点において独創性がある。加瀬氏の論の中には、やや強引な論証と見られる論述も時として見られるが、必ずしも体系的に書かれていないガンディーの膨大な著述を読み解き、それを自分なりの観点から解明しようとした力量は、きわめて高く評価される。

以上の理由により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値のあるものと認められる。